

船に恋して

海へ

The Magazine
for Your Marine Life
シー・ドリーム
VOL.16 KAZIムック

海
な
い
つ
も
優
しい

Sea Dream

Yacht Club Graffity
90周年を迎えた
琵琶湖ヨット倶楽部

Palau is the paradise islands of miracle
サンゴ礁に縁取られた
奇跡の楽園、パラオ

Life in Sea Breeze
海辺で暮らす

JOYFUL TRIP TO THE RIVER ST. LAWRENCE

カナダ・ケベック州

海とフィヨルドと 川の旅

別冊付録

「シー・ドリーム・ゴルフ」

Trance Atlantic

船齢76年、蘇った貴婦人

〈アリーン〉の大西洋横断

ココモ192／パーシング82／フェレッティ690／プリンセスV52



Yacht Club G

湖上に刻まれた90年の記憶

～創立90周年を迎えた琵琶湖ヨット倶楽部のグラフィティ～



1933年(昭和8年)、クラブが太湖汽船(現:琵琶湖汽船)の宣伝に協力し、日活女優を迎えてさまざま撮影を行った。当時のファッションを知る貴重な資料にもなっている

raffity



上：汽船のデッキから沖のヨットを望遠鏡で追いかける女優さんたち。レトロな雰囲気が新鮮に感じる
左：レトロ感あふれる水着姿の女優と木造ディンギーのカット。セールも張つて雰囲気を盛り上げている

日本におけるヨット発祥の地に関しては、諸説あって混沌としているが、琵琶湖ヨット俱楽部のセーリング文化が今年で90周年を迎えたことは疑う余地のない事実である。7人の有志が集まってクラブの前身を立ち上げたのは、まだ日本ヨット協会も発足していない1922年(大正11年)のこと。英國から取り寄せたルールブックを自分たちで翻訳し、ヨットの操船を記した教本も自らが作成。そのクラブ活動は、手探りで始めた大きな夢の探求だった。

文=市川和彦 写真提供=琵琶湖ヨット俱楽部
Text by Kazuhiko Ichikawa, Photo by BIWAKO YACHT CLUB



1922年(大正11年)、日本ヨット俱楽部が生まれた年に撮影された貴重な写真。安盛善助氏というメンバーが上手に舵を操っている



1924年(大正13年)に建造され、琵琶湖周航での美しい姿を披露したクラブ所有のセーリングクルーザー「ユングフラウ」号。歴史を刻む貴重な写真だ



日本ヨット俱楽部時代の艇庫。「ユングフラウ」号を失ってしばらくの間は活動が滞ってしまったが、1930年にこの艇庫を新設することでディンギーを主体にした活動が活発化していった

琵琶湖に生まれた 国内屈指のセーリング文化

わが国初のヨットクラブは、1886年(明治19年)に創設された横浜セーリングクラブ(後に横浜ヨットクラブへ横浜ヨット協会に改名)であろうと多くの人が口を揃えるが、同クラブは居留外国人が中心だった。日本人が育んだヨット発祥の地に関してはさまざまな説があり、ほぼ同時期に各地で産声を上げたことが推測できる。

その最有力地が琵琶湖であり、明治40年頃に地元の人がヨットを走らせた

話が残っている。また、現在の琵琶湖ヨット俱楽部の前身である日本ヨット俱楽部が創設されたのは1922年(大正11年)のことだった。その名からして、日本人初のヨットクラブである可能性がきわめて大きい。

創設メンバーは、京都市立第一商業学校ボート部OBの7人で、漕艇をしながらヨットにも関心を抱いたようである。そのうちの1人、長谷川英一氏の子息である長谷川和之氏(1930年生まれ)

が現在のクラブ会長を務めているので、父親などから聞いた話で多少は当時の様子を知ることができる。

「父は、東京に出て慶應義塾大学に進学してからも漕艇を続けましたが、琵琶湖が恋しくなり、地元に戻ってこのクラブの立ち上げに参画したようです。当時、京都市立第一商業学校では英語に力を入れており、父の卒業アルバムも全ページが英語で書かれていました。そのような背景もあり、クラブの面々は横浜ヨットクラブやKRYC(神戸外国人ヨットクラブ)などからヨットの情報を得ていたようです」

7人は、スカルで漕艇レースを楽しむ



左：クラブ発足当時の様子。艇庫前の浜にはゲタ船と呼ばれた小型ディンギーのほか、奥に5メートル級ディンギーが並んでいる

右：こちらもクラブ設立当時の写真。3人のメンバーがディンギーに乗りながら食事をとっている、いかにも楽しそうだ



1934年に台風で艇庫が崩壊。翌年、立派な艇庫に建て替えられた。専用スロープのある艇庫といい、その隣に設けたテラスつきのクラブハウスといい、うらやましいほどに機能が整っている

傍らディンギーでヨットの操船を覚え、1924年(大正13年)には30フィートのセーリングクルーザー「ユングフラウ」号を地元の桑野造船所で建造。翌年7月には琵琶湖周航を敢行し、寄港地では見物人が集まって注目されたが、同年8月の台風で係留中に大破してしまった。

その後、昭和の時代に入ると英国から取り寄せたヨットのルールブックを翻訳してディンギーレースを活発化させ

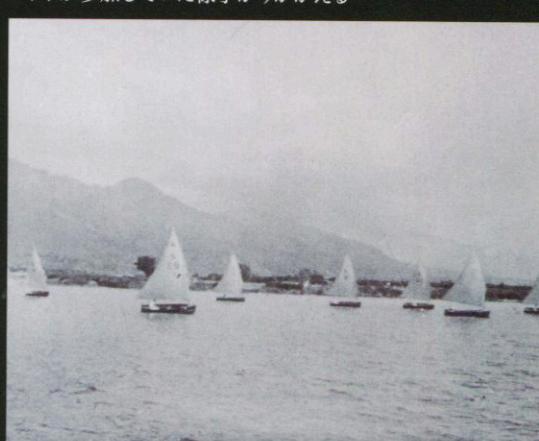
ていき、1932年(昭和7年)に日本ヨット協会が発足すると、クラブ名を譲って琵琶湖ヨット倶楽部に改名。同志社大学や京都大学のヨット部設立に力を貸し、同時期にできた九州帝国大学ヨット部などと交流しながらヨットの普及に努めていった。

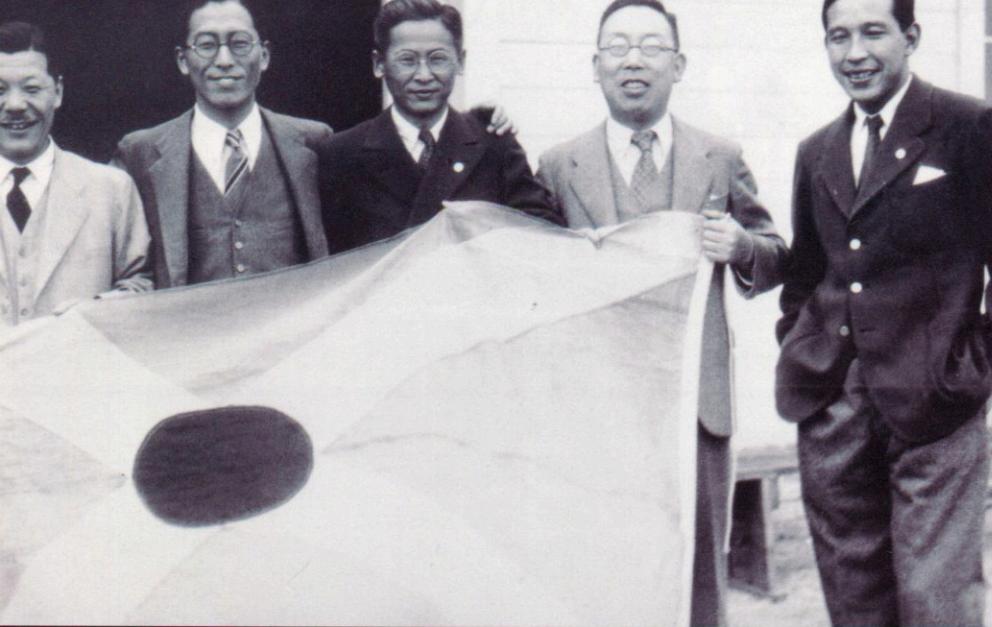
クラブ艇庫前の沖で開催された第1回西部日本ヨット選手権大会(1933年)。当時から相当数のヨットが参加していた様子がうかがえる



左：クラブ独自で「ヨット教範」というセーリングの解説書を発行。このページではヨットの各部名称が細かく記されている

右：日本ヨット倶楽部の趣意書の表紙。規約や事業に関する説明に加え、「社交とスポーツを併せ持つ『倶楽部』が生活の質を高め、それが近代化につながる……」という大望が語られている





日本ヨット協会が発足するとクラブ旗に使っていた十字に日の丸のデザインを協会に譲り、琵琶湖ヨット倶楽部としては十字を斜めにしたXのラインを使うことにした

湖に育まれたクラブライフの思い出

日本ヨット協会ができたことを受け、自らの意思で改名した琵琶湖ヨット倶楽部。その後の様子は長谷川氏自身の記憶にも残されている。

「日本ヨット協会ができたとき、父たちはクラブを改名してクラブ旗のデザインまで譲りました。琵琶湖だけでなく日本中にヨットを広めたいという思いがあつたからだと思います。また、協会ができたことを受けてクラブでも競技に力を入れていきましたが、だからといってメンバーの子どもたちが特に厳しい練習を受けたことはありませんでした。私の記憶に強く残っているのは、ヨットに乗せ

られたことよりもメンバー同士が家族ぐるみで浜に出て遊んだ光景です。皆でクラブハウスに泊まって湖の水で米を研ぎ、浜を掘ってシジミを取るなどして食事を作り、近くの漁師がうなぎや鯉を持ってきてくれることもありました」

幼い頃には、メンバーの子どもたちが裸になって湖に流れ入る川でメダカすべりを楽しみ、学校に行く頃になると、風がなければヨットに乗らず、浜で野球をして遊んだものだったと語る長谷川氏。まさに、社交とスポーツを併せ持つ「倶楽部」が生活の質を高めるという、趣意書に掲げたクラブライフがメンバーたち



艇庫前のスロープに並んだクラブ艇。目の前に広々とした湖面が広がっている(1933年の写真)

の間に浸透していたことがよく分かる。

その一方、ヨットの活動でも競技に加えてクルージングも旺盛になっていた。右ページに掲載した記事の写真は、創刊したばかりの船誌1932年(昭和7年)12月号に掲載された「琵琶湖周航の記」であるが、これを読むとメンバーの有志が食パン5斤、米一升、そして缶詰などの食料を16フィート艇に持ち込んで出帆し、3日がかりで琵琶湖を一周した記録がつぶさに記されている。

琵琶湖という恵まれたフィールドのもと、ディンギーに乗りながら精一杯の冒険を楽しんでいた先人たち。日本ヨット協会が設立されて船誌が誕生した1930年代は、戦前におけるヨットの隆盛期だったといえるだろう。

創立メンバーの1人、吉本正雄氏が1925年(大正14年)にファイアンセをクラブに連れてきたときの写真。ヨットに腰を下ろした女性の和服姿が印象的だ



左：創立メンバーの1人、長谷川英一氏とその子息で現会長の長谷川和之氏(1933年の写真)

右：1935年(昭和10年)頃のクラブハウス。複数の家族がテラスや庭で思い思いの時を楽しんでいる

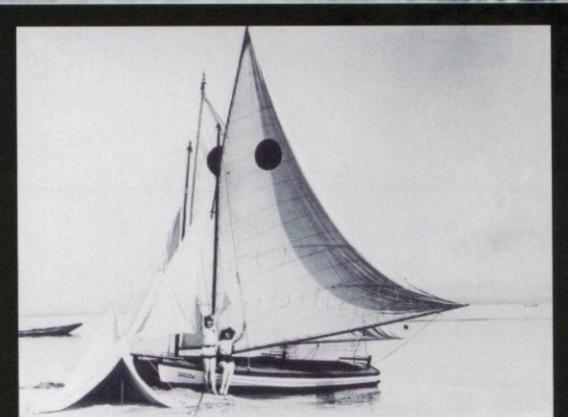


クラブハウス前の広場で野球を楽しむ子どもたち(1933年の写真)。

沖にヨットが浮かんでいる様が絵になっている



船 1932年12月号に掲載された
「琵琶湖周航の記」。右ページに
は沖の白石を回航するときのオン
ボードショットも紹介されている



上：日活女優を招いて撮影した太湖汽船の宣伝写真の一部。
このカットは夏川静江と伏見信子をモデルに艇庫前で撮っている(1933年)

下左：ヨットの模型を使って撮ったイメージカット。モデルになつた女優の水着が当時のファッショントレンドを表している

下右：汽船のデッキで撮影されたイメージカット。こちらも当時のファッショントレンドやメイクに注目したい



受け継がれていくクラブの伝統



琵琶湖ヨット倶楽部からベルリンオリンピックに出場した吉本善多選手。その活躍の経緯は、靖国神社に奉納されている碑(硫黄島で戦没)にも刻まれている

琵琶湖ヨット倶楽部における戦前最大のエピソードの一つが、メンバーによるオリンピック参加であろう。日本ヨット協会は、設立4年後の1936年にベルリンで開催された第11回大会に初めて選手団を派遣。琵琶湖ヨット倶楽部からも吉本善多というメンバーがヨレ級の選手として参加した。

その際、吉本選手は彼の地で微風の湖に向かってセールを大きくしたEZ級というディンギーに魅せられて帰国。そこで鈴木英氏というメンバーがドイツから

図面を取り寄せ、地元の桑野造船で建造。以後、クラブ艇の中心的存在として活躍し、時代とともに老朽化が進んだが、1992に大修復が敢行されて現在もクラブのシンボルになっている。

一方、そんな話を聞きつけたオーストリアのヨット研究家が驚いた。EZ級の故郷では時代の流れを受けて設計図が幻の存在になっていたのである。そこで、琵琶湖ヨット倶楽部が保存していた図面のコピーが70年ぶりにヨーロッパに渡ることになり、オーストリアのヨットクラブとの交流も始まった。

また、琵琶湖ヨット倶楽部では、設立当初から交流のあったKRYC(神戸外国人ヨットクラブ)のE.B.テリー氏が設計したディンギー、通称テリーボートを長く愛用していたが、こちらも1999年にレストアを敢行。世代を超えてクラブの血統が守られ続けている。

「戦後、進駐軍が来たときにクラブ艇は彼らのレジャー用に一時、接収されてしまいましたが、EZ級とテリーボートだけ



1954年(昭和29年)に撮影された活動の様子。テリーボートが桟橋にもやわれている

は残されました。この2艇種は操船が難しかったのです。そんなエピソードもあるので、それぞれが復原されてとてもうれしく思っています」

先のページでは、幼い頃に父親と手をつないだ写真を紹介した長谷川氏であるが、80歳を超えた現在はヨットレスに出ていない。しかし、由緒ある艇を復活させた後輩メンバーたちが、しっかりと日本屈指の伝統あるクラブライフを受け継いでいる。今年9月に、晴れて創立90周年祝賀会を行った琵琶湖ヨット倶楽部の歴史の火は、消すわけにいかないのである。

戦後は海外遠征も積極的に展開。1974年にノルウェーで開催されたヨーロッパ級世界選手権大会に参加したときは、地元の新聞にチームが紹介された



進駐軍によるクラブ艇の接収が終わって、再び本格的に活動を開始したときのクラブハウス。メンバーの笑顔の奥には沖に走る何艇かのヨットが写っている





1



1：琵琶湖ヨット倶楽部はさまざまなレースを企画している。写真は京都ヨットクラブとの対抗戦として1969年から毎年開催されている比叡レガッタの様子。シーホースなどの木造船も数多く参戦する

2：大きなセールとスリムなハルが特徴のEZ級。1975年のビワコ・カインド・レガッタではゲートスタートのパスファインダー（スタートの目印）を務めた

3：ピカピカにレストアされたテリー級ヨット〈バイオニア〉号。その名のとおり、EZ級とともに現存する日本最古のディンギーであるとされている



4



5



6